

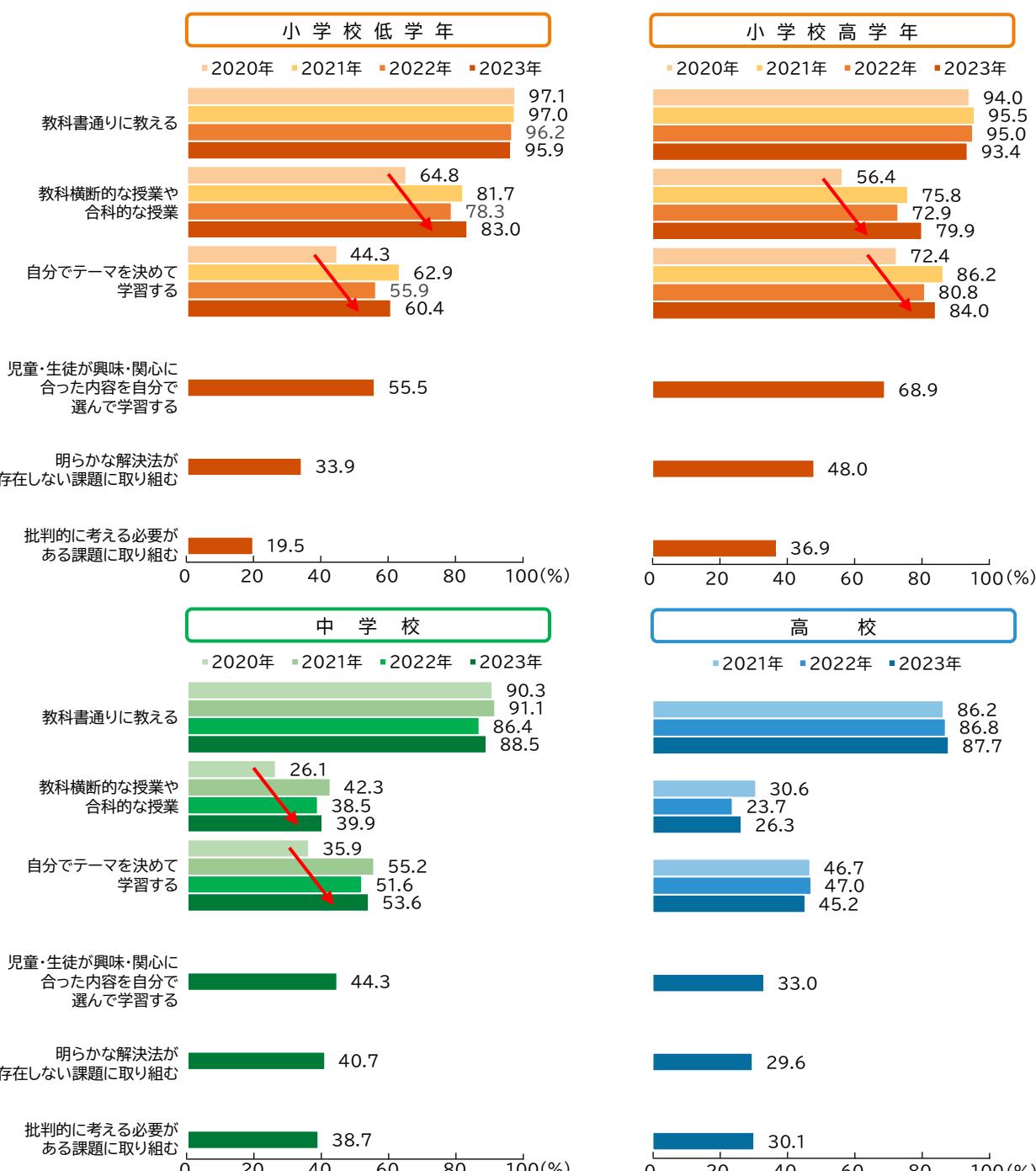
教科の授業内容

児童・生徒が「内容を自分で選んで学習する」は、小学校高学年で69%

教科の授業内容は、「教科書通りに教える」の比率が高く、小学校で9割台、中・高校で8割台である。2020年から2023年にかけての変化をみると、小・中学校では、「教科横断的な授業や合科的な授業」「児童・生徒が自分でテーマを決めて学習する」の比率が高まっているが、年による増減がある。今回初めて尋ねた「児童・生徒が興味・関心に合った内容を自分で選んで学習する」の比率は、小学校高学年で69%と高かった。また、「明らかな解決法が存在しない課題に取り組む」「批判的に考える必要がある課題に取り組む」も、小学校高学年の比率がもっとも高かった(48%、37%)。小学校の授業を踏まえ、中・高校でのさらなる取り組みが求められる。

Q あなたは教科の授業において、次のような内容の授業をどれくらい行っていますか。

図2-1 教科の授業内容(経年比較)



※質問項目は、2021年に、わかりやすさを考慮し、比較できる範囲内で文言の変更を行っている。

※「児童・生徒が興味・関心に合った内容を自分で選んで学習する」「明らかな解決法が存在しない課題に取り組む」「批判的に考える必要がある課題に取り組む」は2020年～2022年は尋ねていない。

※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

教科の授業方法（1/2）

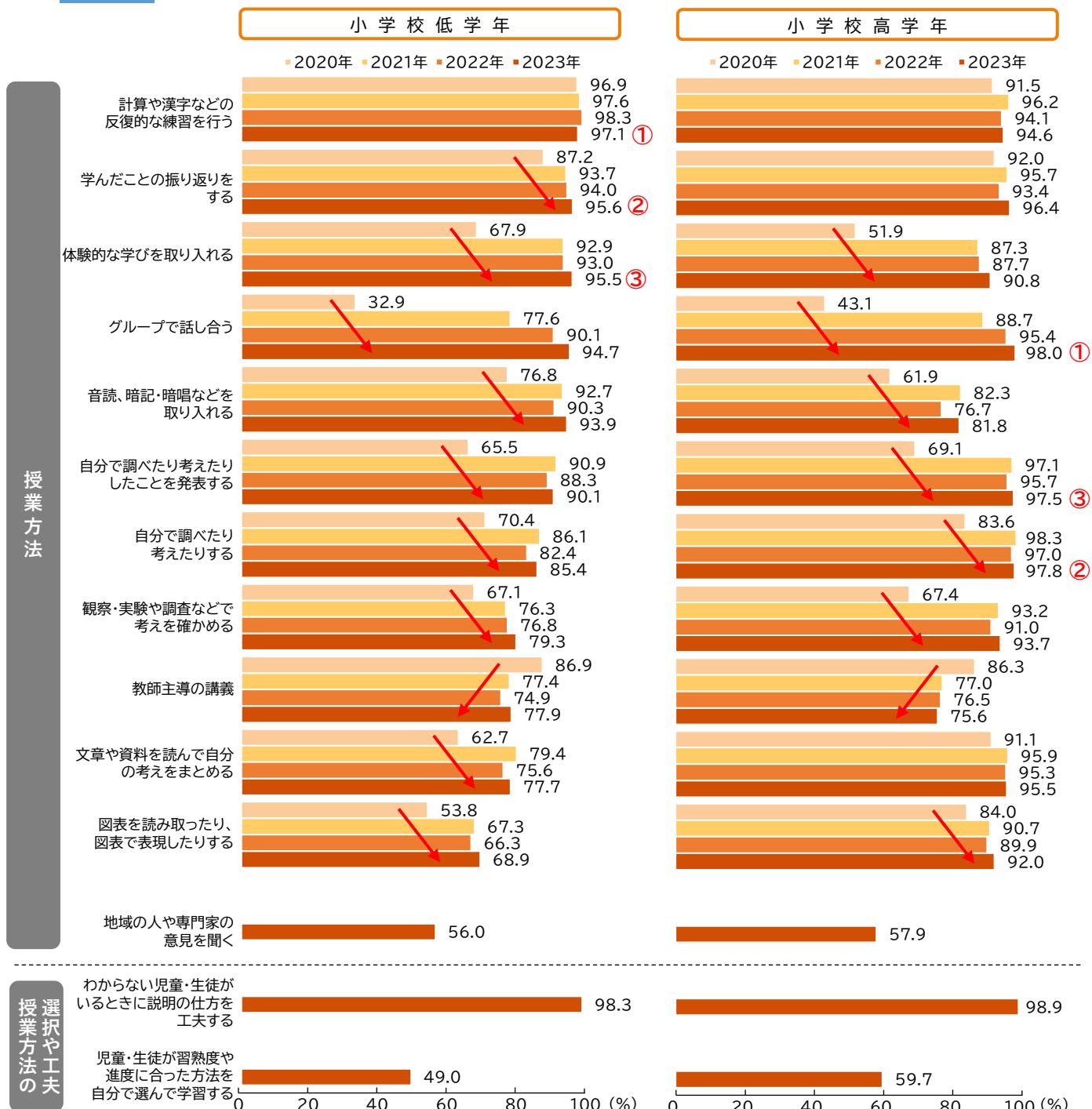
**ここ3年間で、対話的・活動的な授業が増加
児童が「方法を自分で選んで学習する」は、小学校高学年で60%**

小学校では、2020年からの3年間で、「グループで話し合う」「体験的な学びを取り入れる」「自分で調べたり考えたりしたことを発表する」などの対話的・活動的な授業の比率が大幅に高まり、「教師主導の講義」の比率が低下している。コロナ禍の制限緩和に伴うものだけでなく、新学習指導要領の趣旨の実現を目指す動きと考えられる。今回初めて尋ねた「わからない児童・生徒がいるときに説明の仕方を工夫する」の比率は、ほぼ100%と高い。また、「児童・生徒が習熟度や進度に合った方法を自分で選んで学習する」の比率は、小学校高学年が約6割、低学年でも約5割で、児童が自分で学び方を選ぶ機会が比較的多く設けられている。



あなたは教科の授業において、次のような方法の授業をどれくらい行っていますか。

図2-2 教科の授業方法(経年比較)



※質問項目は、2021年に、わかりやすさを考慮し、比較できる範囲内で文言の変更を行っている（p.18図2-2、p.19図2-2つづき）。

※「地域の人や専門家の意見を聞く」「わからない児童・生徒がいるときに説明の仕方を工夫する」「児童・生徒が習熟度や進度に合った方法を自分で選んで学習する」は2020年～2022年は尋ねていない（p.18図2-2、p.19図2-2つづき）。

※「学んだことの振り返りをする」は、2020年～2022年は「振り返ることを取り入れる」と尋ねている。

※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。 ※①、②、③は、2023年の比率の上位1～3位を示している。

教科の授業方法 (2/2)

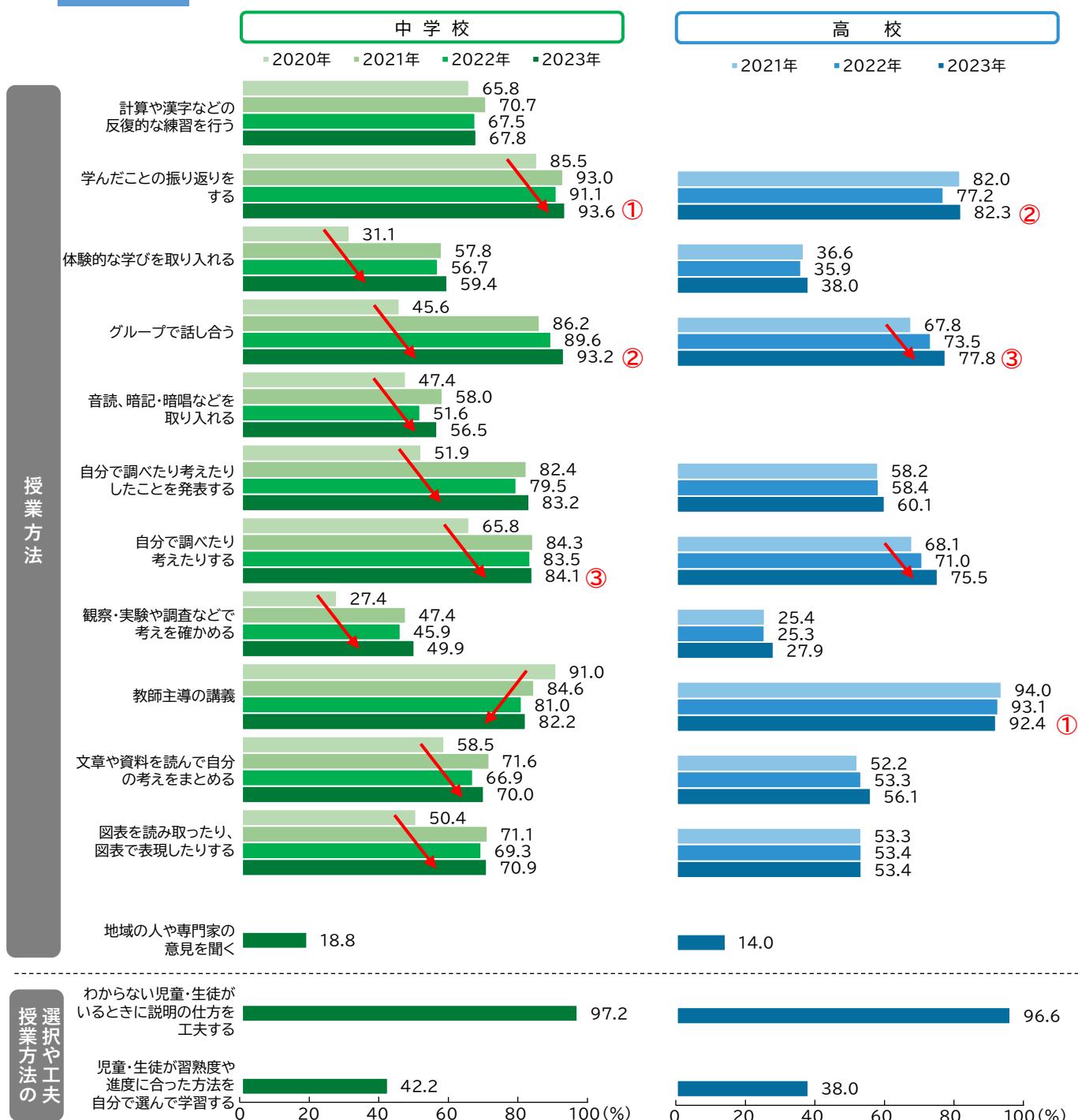
高校でも対話的・活動的な授業が増加傾向

中学校は、小学校と同様に、2020年からの3年間で、対話的・活動的な授業の比率が大幅に高まり、「教師主導の講義」の比率が低下している。ただし、ここ1年間の変化は小さい。高校も、1年ごとの変化は小さいが、2021年からの2年間で、「グループで話し合う」「自分で調べたり考えたりする」、2022年からの1年間で「学んだことの振り返りをする」の比率が高まっており、対話的・活動的な授業は、高校でも増加傾向にある。



あなたは教科の授業において、次のような方法の授業をどれくらい行っていますか。

図2-2つづき 教科の授業方法(経年比較)



※高校は「計算や漢字などの反復的な練習を行う」「音読、暗記・暗唱などを取り入れる」の2項目を尋ねていない。

※「よく行っている」+「ときどき行っている」%。

※「学んだことの振り返りをする」は、2020年～2022年は「振り返ることを取り入れる」と尋ねている。

※①、②、③は、2023年の比率の上位1～3位を示している。

高校における探究活動のテーマ

進学校ほど多様なテーマに取り組んでいる

多くの取り組まれている探究活動のテーマは、「社会や地域の課題解決」「職業や自己の進路」で、2021年から傾向は変わっていない（図2-3）。普通科の学校タイプ別（p.5参照）にみると、「国際的な社会課題の解決」「自然科学や数学的事象」「文学・言語・歴史・文化・芸術」のテーマは、進学校ほど取り組まれている（表2-1）。教科別にみると、理科の教員の授業では「自然科学や数学的事象」の比率が高いなど、教科の特性と結びついたテーマが選ばれる傾向がある（表2-2）。



あなたが指導している探究活動では、主にどのような課題に取り組んでいますか。

図2-3

探究活動のテーマ(経年比較)

高 校

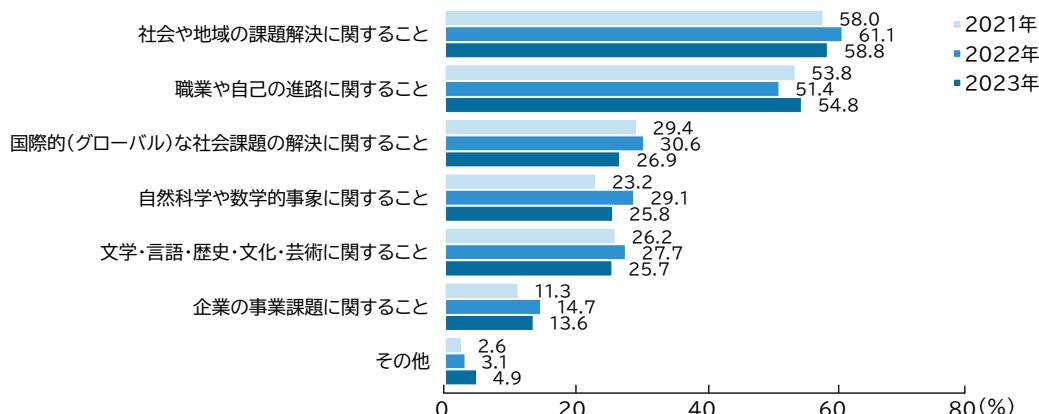


表2-1

探究活動のテーマ(2023年、普通科・学校タイプ別)

高 校

(%)

	進路多様校	中堅校B	中堅校A	進学校B	進学校A
社会や地域の課題解決に関すること	59.8	56.4	63.5	<u>66.7</u>	57.8
職業や自己の進路に関すること	58.8	60.6	<u>61.4</u>	53.2	44.2
国際的(グローバル)な社会課題の解決に関すること	11.6	22.0	27.4	32.0	<u>39.7</u>
自然科学や数学的事象に関すること	14.6	21.2	18.8	26.8	<u>41.8</u>
文学・言語・歴史・文化・芸術に関すること	16.6	21.2	23.5	27.3	<u>35.2</u>
企業の事業課題に関すること	13.3	12.3	11.2	<u>14.8</u>	13.8
その他	<u>4.7</u>	<u>4.7</u>	4.0	3.4	3.8

表2-2

探究活動のテーマ(2023年、教科別)

高 校

(%)

	国語	地理歴史	公民	数学	理科	外国語
社会や地域の課題解決に関すること	60.5	<u>68.7</u>	63.3	51.8	53.0	61.3
職業や自己の進路に関すること	<u>62.2</u>	53.0	55.4	53.7	49.7	55.8
国際的(グローバル)な社会課題の解決に関すること	25.2	34.9	31.7	20.7	19.6	<u>37.0</u>
自然科学や数学的事象に関すること	16.2	19.9	16.5	30.6	<u>46.1</u>	19.6
文学・言語・歴史・文化・芸術に関すること	33.1	<u>37.7</u>	23.7	16.4	14.2	32.6
企業の事業課題に関すること	12.6	12.8	13.7	14.1	12.0	<u>15.7</u>
その他	4.8	3.9	3.6	4.8	4.2	<u>5.5</u>

※「総合的な探究の時間」や学校設定科目における探究活動について尋ねている（図2-3、表2-1～2）。

※探究活動を「指導している」と回答した教員のみの回答（図2-3、表2-1～2）。

※複数回答（図2-3、表2-1～2）。

※学校タイプはp.5参照（表2-1）。

※表2-1は学校タイプの5群中、表2-2は教科の6群中、もっとも比率が高いものにそれぞれ下線を引いている。

高校における探究活動の内容

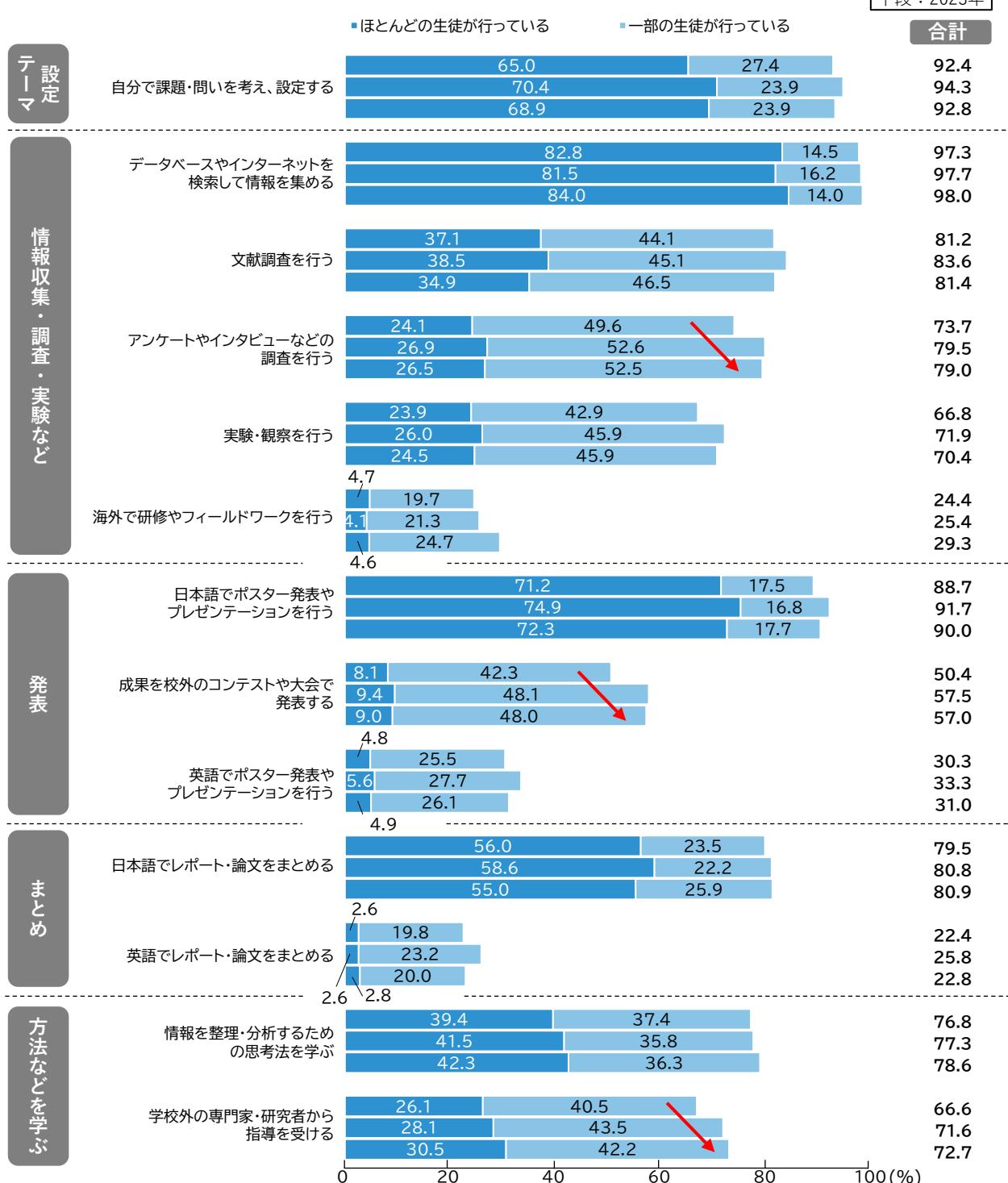
調査や発表、専門家からの指導など外部との関わりが増加

生徒の多くが行っている探究活動の内容は、「インターネットなどを「検索して情報を集める」、「課題・問い合わせを考え、設定する」「日本語でポスター発表やプレゼンテーションを行う」で、2021年から傾向は変わっていない。ここ2年間の変化をみると、比率が5ポイント以上増加しているのは、「成果を校外のコンテストや大会で発表する」「学校外の専門家・研究者から指導を受ける」「アンケートやインタビューなどの調査を行う」で、学校外の場やリソースを活用する活動が増加しているが、ここ1年間の変化は小さい。

Q 探究活動のなかで、どれくらいの生徒が次のような活動を行っていますか。

図2-4 生徒が取り組む探究活動の内容(経年比較) 高校

上段：2021年
中段：2022年
下段：2023年



※「総合的な探究の時間」や学校設定科目における探究活動について尋ねている。
※探究活動を「指導している」と回答した教員のみの回答。

宿題の頻度と時間

宿題の時間は減少傾向、「授業でやり残した作業や課題」の宿題が増加

宿題を出す頻度をみると、小・中学校とも、ここ2年間の変化は小さい（図2-5）。しかし、1日（1回）あたりの宿題の時間は、小・中学校とも「15分」の比率が増加している（図2-6）。宿題の内容は、小学校では「反復的な練習」「音読」「学校指定の副教材、問題集」の比率が高く、中学校では「学校指定の副教材、問題集」「授業の復習」「授業でやり残した作業や課題」などが高い。特に、「授業でやり残した作業や課題」の比率は、小・中学校とも、ここ2年間で増加している（図2-7）。

Q あなたはふだんどれくらい宿題を出していますか。

Q あなたがふだん出す宿題は、平均的な児童・生徒にとってだいたい1日(1回)何分くらいの量になりますか。

図2-5 宿題を出す頻度(経年比較)

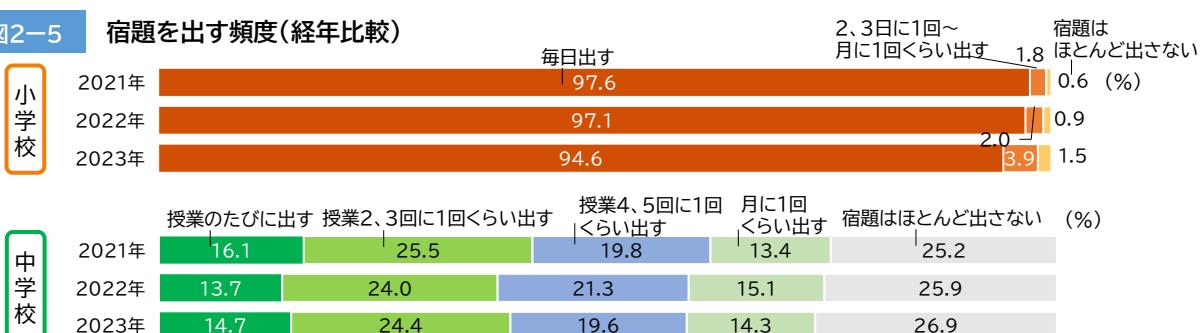
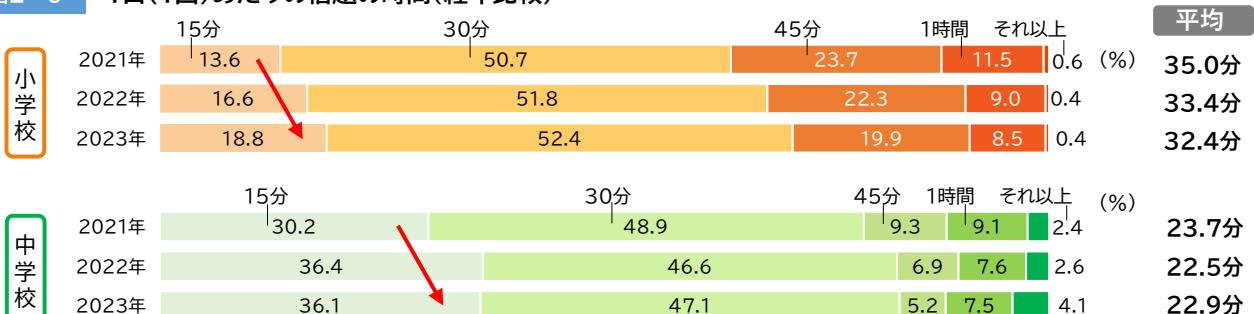


図2-6 1日(1回)あたりの宿題の時間(経年比較)



Q あなたは、ふだん、どのような内容の宿題を出していますか。

表2-3 宿題の内容(経年比較)

	小学校 (%)			中学校 (%)		
	2021年	2022年	2023年	2021年	2022年	2023年
計算や漢字などの反復的な練習	97.1	97.2	96.1	56.6	54.7	55.2
音読	89.6	88.7	87.3	18.2	17.4	17.4
学校指定の副教材、問題集	86.7	88.3	86.5	87.8	85.6	86.1
授業の復習	80.6	77.7	78.6	74.8	72.4	76.0
自学ノート(自主的に課題を決めて学習する宿題)の提出	-	62.9	63.1	-	43.5	45.4
前の学年の学習内容の復習	62.8	58.8	60.1	42.0	39.2	44.0
授業でやり残した作業や課題	39.7	53.4	53.6	56.1	69.9	70.3
自作プリント	58.8	54.2	50.5	64.2	61.5	60.0
教科書の問題	40.1	43.3	46.4	45.9	46.1	46.7
調べ学習	36.7	39.6	39.7	38.1	38.6	38.4
作文やレポート	41.4	38.8	38.0	43.7	43.5	44.5
授業の予習	15.9	14.1	14.6	29.9	26.7	27.0
定期試験対策になる内容	-	-	-	76.5	76.2	76.4
高校入試対策になる内容	-	-	-	58.2	55.4	57.1

※長期休業期間(夏休みなど)を除くふだんのことを尋ねている（図2-5～6、表2-3）。

※「2、3日に1回～月に1回くらい出す」は、「2、3日に1回くらい出す」+「週に1回くらい出す」+「月に1回くらい出す」の%（図2-5 小学校）。

※小学校は1日、中学校は1回の量を尋ねている。平均時間は「宿題はほとんど出さない」と回答した教員の回答を「0分」として含めて算出している（図2-6）。 「それ以上」は、「1時間30分」+「2時間」+「それ以上」の%（図2-6 中学校）。

※小学校は「定期試験対策になる内容」「高校入試対策になる内容」の2項目を尋ねていない。「自学ノート(自主的に課題を決めて学習する宿題)の提出」は2021年は尋ねていない（表2-3）。

※宿題の内容は、宿題の頻度（図2-5）で「宿題はほとんど出さない」と回答した教員を除いて算出している。2021年と2023年の比率に5ポイント以上差がある場合に、比率が高いものに下線を引いている（表2-3）。

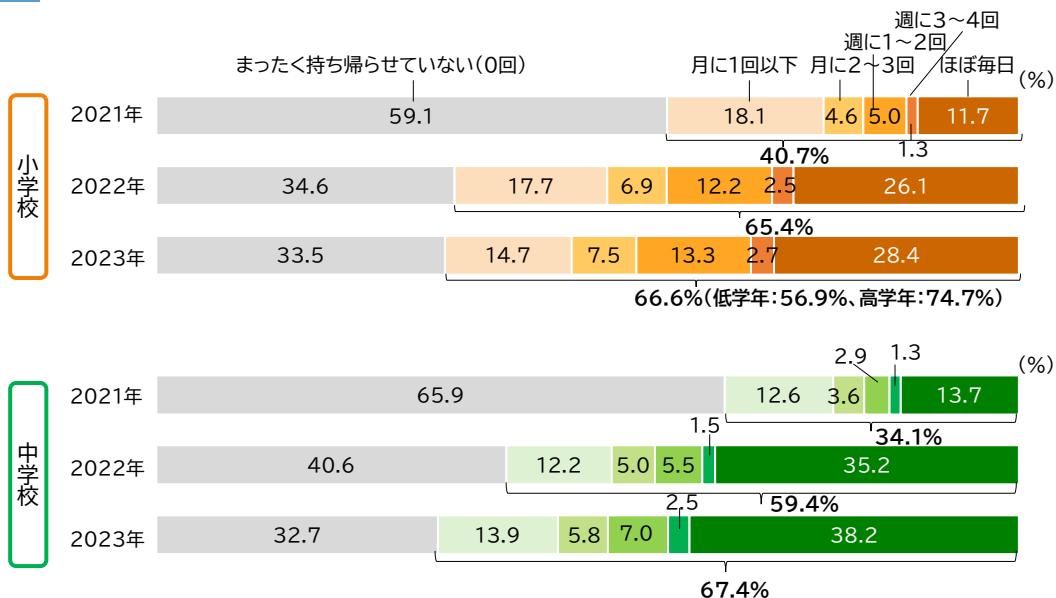
1人1台端末の持ち帰り頻度と使い方

中学校で端末の持ち帰りの比率が増加

中学校では、1人1台端末を家に持ち帰らせている比率が増加し、小学校と同程度の67%になった（「ほぼ毎日」～「月に1回以下」の合計、図2-7）。家の使い方は、ここ2年間の変化は小さいが、小学校では「宿題をさせている」の比率が増加している。また、中学校では「使い方は児童・生徒に任せている」の比率が年々増加している（図2-8）。

Q ふだん(長期休業期間[夏休みなど]を除く)、あなたは1人1台端末を、児童・生徒にどれくらいの頻度で家に持ち帰らせていますか。

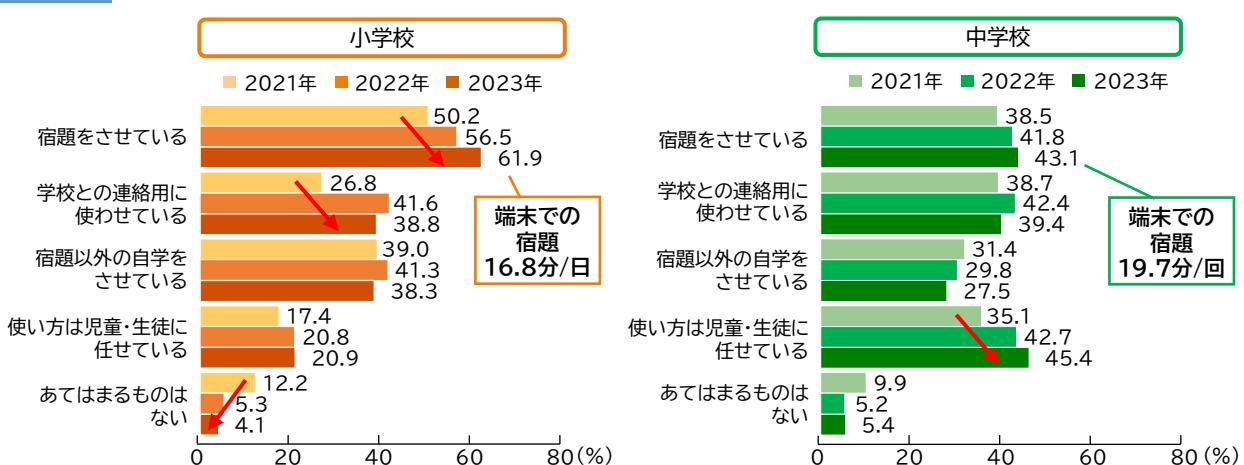
図2-7 1人1台端末の持ち帰り頻度(経年比較)



※1人1台端末の「導入が完了している（あてはまる）」と回答した教員のみの回答。

Q ふだん(長期休業期間[夏休みなど]を除く)、児童・生徒に持ち帰らせた1人1台端末をどのように使わせていますか。

図2-8 持ち帰らせた1人1台端末の使い方(経年比較)



※1人1台端末を家に持ち帰らせている教員（図2-7の「ほぼ毎日」～「月に1回以下」）のみの回答（図2-8）。

※複数回答（図2-8）。

※宿題の時間は、持ち帰らせた1人1台端末で「宿題をさせている」と回答した教員に尋ねた「1人1台端末を使って出す1日（回）の宿題の量」の回答から平均を算出した（図2-8、2023年）。

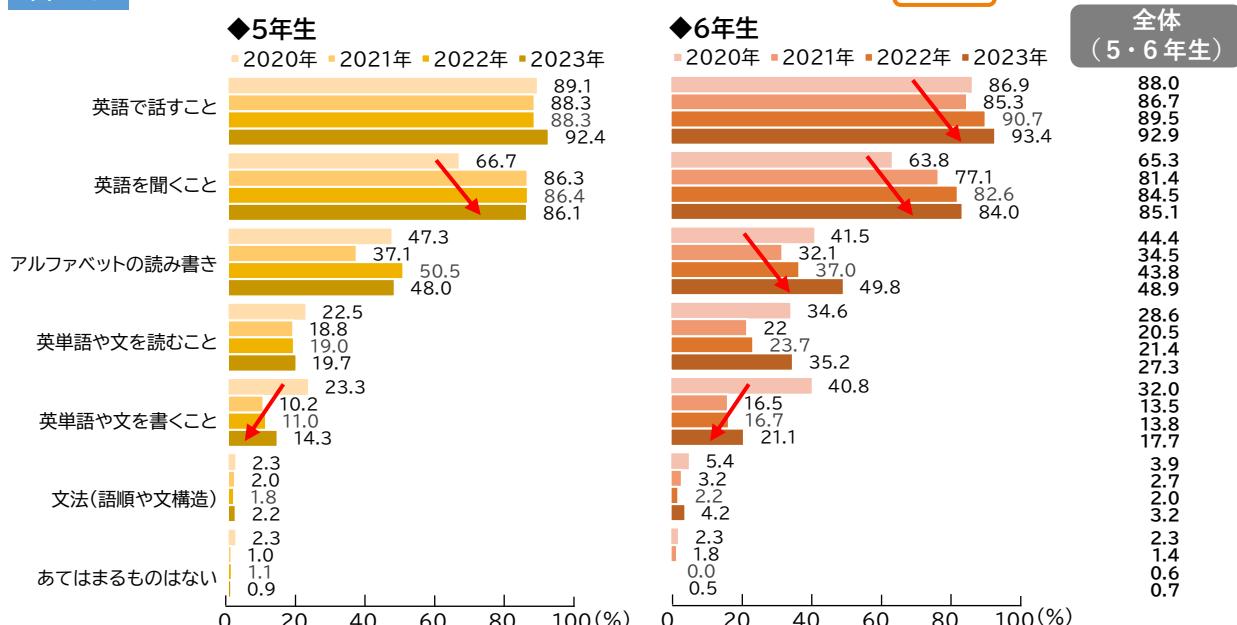
小学校の外国語の授業と評価

授業では「話す・聞く」を重視 評価の材料として「パフォーマンステスト」が継続して増加

小学校の外国語の授業で教員が特に意識しているのは、「英語で話すこと」「英語を聞くこと」で、小学校段階での大切な指導が2020年から継続して重視されている。「アルファベットの読み書き」「英単語や文を読むこと」は、特に6年生で、2021年からの2年間で増加している一方で、「英単語や文を書くこと」は2020年から2021年にかけて減少したままである（図2-9）。評価の材料では、「パフォーマンステスト」が2020年から継続して増加している。「英語で話すこと」の評価において重要な役割を果たすためだと考えられる（図2-10）。

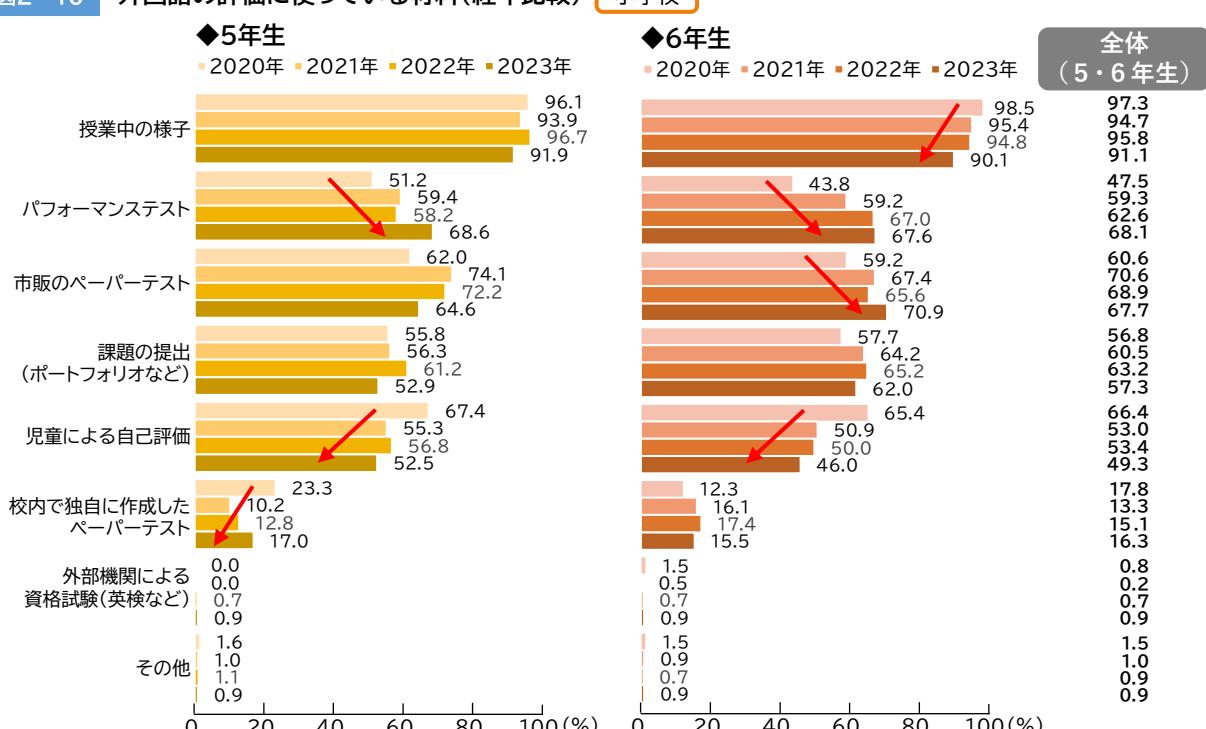
Q 「外国語」の授業で、特に重点的にやろうと意識していることはありますか。

図2-9 外国語の授業で特に重点的にやろうと意識していること(経年比較) 小学校



Q 「外国語」の評価の材料には何を使っていますか。

図2-10 外国語の評価に使っている材料(経年比較) 小学校



※5年生と6年生の担任のうち、「外国語の授業を担当している」と回答した教員のみの回答（図2-9～10）。

※複数回答（図2-9～10）。

中学校・高校の外国語の指導と評価

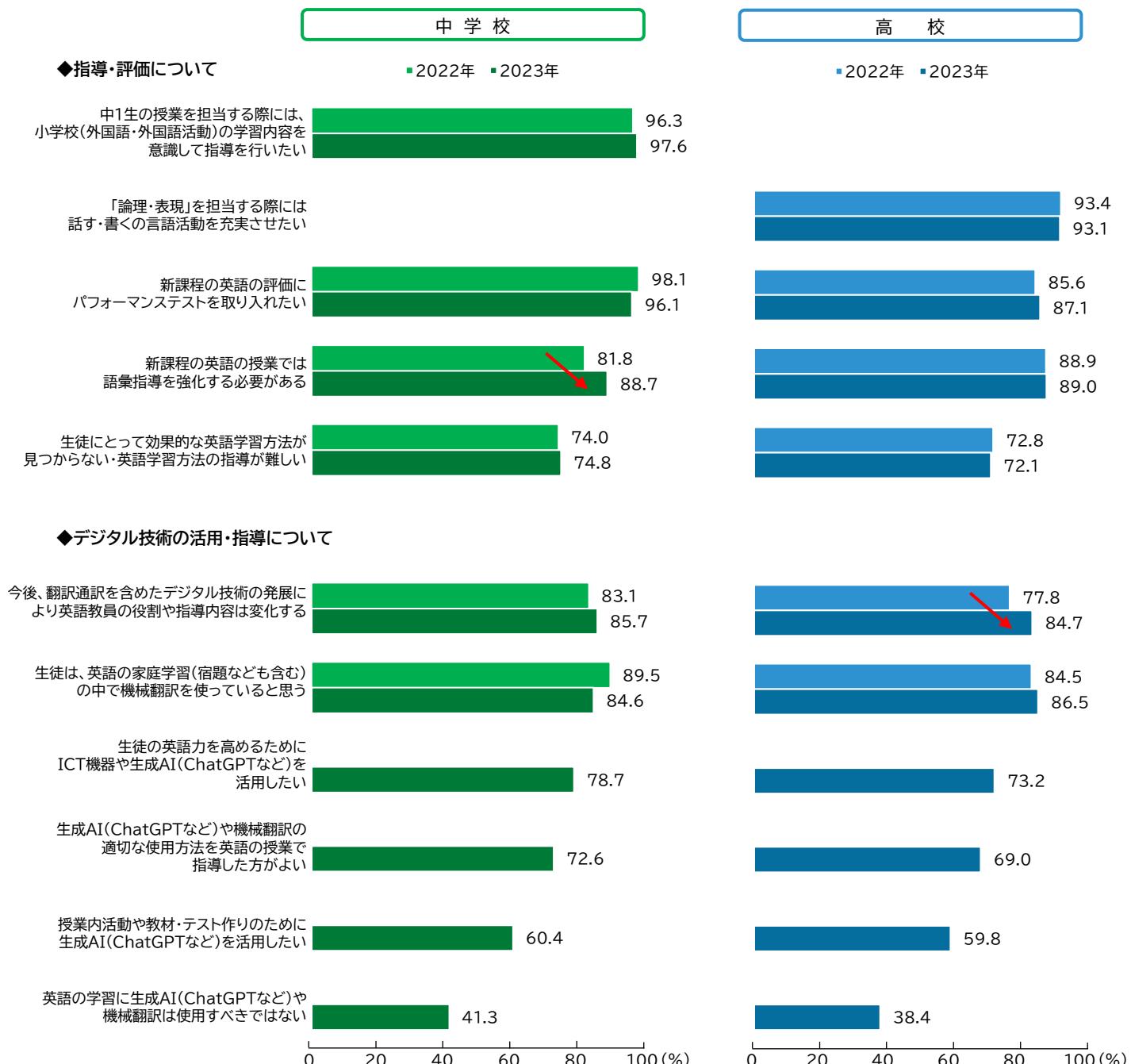
「生成AIや機械翻訳の適切な使用方法を英語の授業で指導した方がよい」は約7割

指導・評価（全般）について、ここ1年間の変化は小さいが、中学校で「語彙指導を強化する必要がある」の比率が増加している。また、「効果的な英語学習方法が見つからない・英語学習方法の指導が難しい」は、中・高校とも7割台のままである。デジタル技術の活用・指導については、高校で「デジタル技術の発展により英語教員の役割や指導内容は変化する」の比率が増加している。「生成AIや機械翻訳の適切な使用方法を英語の授業で指導した方がよい」の比率は、中・高校とも約7割である。



英語指導において、あなたは次のようなことをどれくらいそう思いますか。

図2-11 英語指導に関する意識（経年比較）



※中学校は「『論理・表現』を担当する際には話す・書くの言語活動を充実させたい」、高校は「中1生の授業を担当する際には、小学校(外国語・外国語活動)の学習内容を意識して指導を行いたい」の各1項目を尋ねていない。

※「生徒の英語力を高めるためにICT機器や生成AI(ChatGPTなど)を活用したい」～「英語の学習に生成AI(ChatGPTなど)や機械翻訳は使用すべきではない」の4項目は2022年は尋ねていない。

※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

学習履歴の活用実態

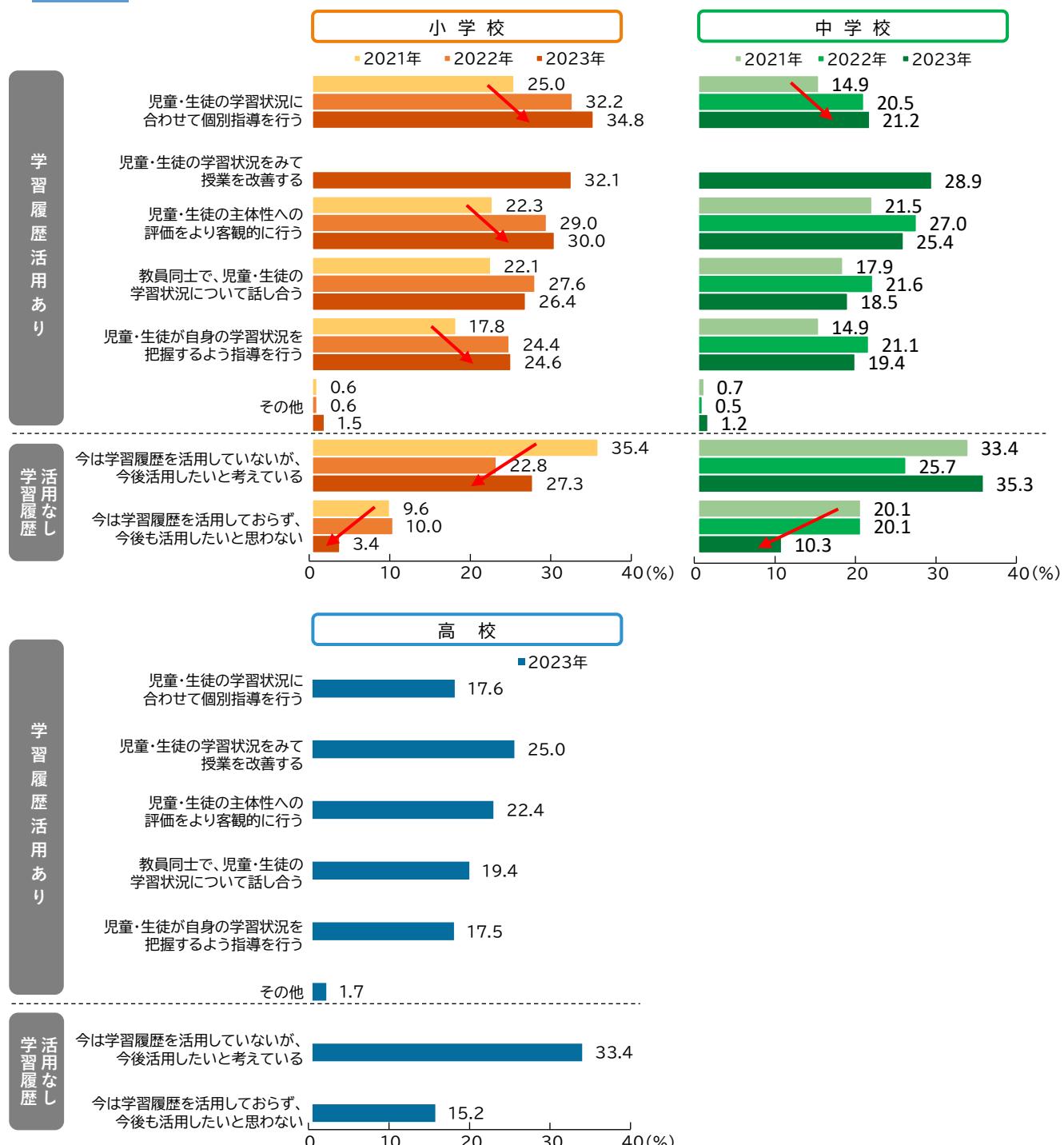
ここ2年間で、学習履歴の活用が増加

学習履歴の活用の仕方の変化をみると、ここ2年間で、「個別指導を行う」（小・中学校）、「主体性への評価をより客観的に行う」「児童・生徒が自身の学習状況を把握するよう指導を行う」（小学校）の比率が増加している。また、今回初めて尋ねた「児童・生徒の学習状況をみて授業を改善する」は小学校で3割台、中・高校で2割台である。「今は学習履歴を活用していないが、今後活用したいと考えている」の2023年の比率は、小学校が2割台、中・高校が3割台であり、学習履歴の活用は今後も進むと考えられる。



あなたは1人1台端末に残された児童・生徒の学習履歴を活用して、次のことをしていますか。

図2-12 学習履歴の活用有無と活用の仕方(経年比較)



※小・中学校は、1人1台端末の「導入が完了している（あてはまる）」と回答した教員のみの回答。

※小・中学校の「児童・生徒の学習状況をみて授業を改善する」は2021年、2022年は尋ねていない。高校は2021年、2022年は尋ねていない。

※「学習履歴活用あり」の6項目は複数回答、「学習履歴活用なし」の2項目は「学習履歴活用あり」に回答しなかった教員対象で単一回答。

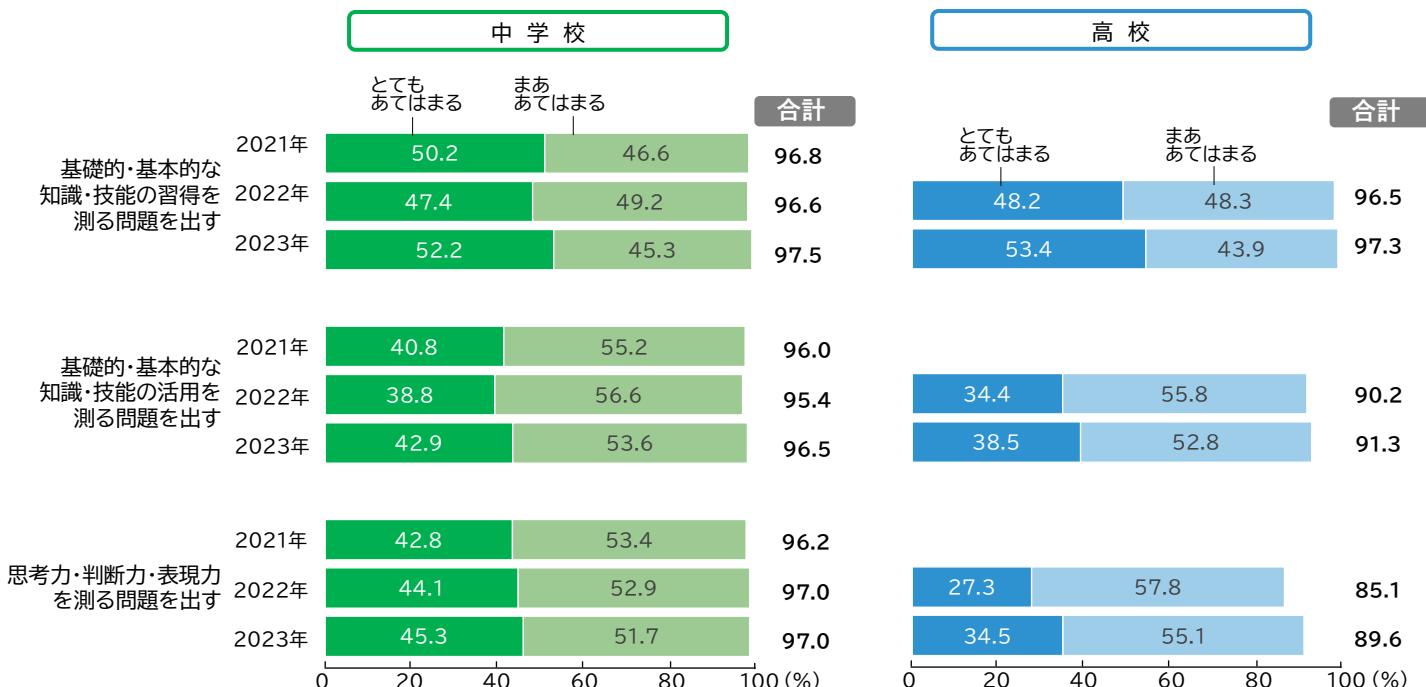
定期試験の内容と回数

高校では、中間・期末テストの回答が減少傾向

定期テストの内容をみると、中学校では、「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」を測る問題を出す比率が、ほぼ同程度（9.5割以上）である。高校では、「習得」（9.5割強）の比率が高いが、「思考力・判断力・表現力」の比率も増加傾向にある（9割弱、図2-13）。1年間のテストの回数をみると、高校は、ここ2年間で、中間テスト、期末テストが減少傾向、単元テストが増加傾向である（表2-4）。

Q あなたが定期テストの問題を作成するときに、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図2-13 定期試験の内容(経年比較)



Q あなたが主に担当している学年の教科について、次のテストは年間何回ありますか（ありましたか）。

表2-4 1年間のテストの回数(各年度、平均)

(回)

	単元テスト	中間テスト	期末テスト	合計	
中学校	2021年度	4.43	1.66	2.63	8.72
	2022年度	4.69	1.60	2.59	8.88
	2023年度	4.57	1.57	2.58	8.73
高校	2021年度	1.77	2.01	2.75	6.53
	2022年度	2.03	1.98	2.74	6.75
	2023年度	2.24	1.90	2.65	6.79

※高校は2021年は尋ねていない（図2-13）。

※2021年度の数値は、2022年度に、昨年度（2021年度）について回答してもらったもの（表2-4）。